全国草原再生ネットワーク ニュースレター

vol.64
Oct. 2025



塩塚高原に広がるススキ草原

第 15 回全国草原サミット・シンポジウム in ここのえ

全国草原サミット・シンポジウム　プレイベントについて

（帆足ちひろ：大分県九重町）

来年九重町で開催される全国草原サミット・シンポジウムに向けて、機運醸成のために、今年度はプレイベントを開催しましたので、その様子について紹介します。

１．くじゅうフェス（※1）「草原スタンプラリーとジェットシューター体験」（8 月 3 日：長者原園地）

くじゅうフェスにおいて、草原スタンプラリーとジェットシューター体験を実施しました。スタンプラリーでは、参加者は会場内やタデ原、ビジターセンターに設置したブースをめぐり「野焼き」や「ヒゴタイ」等草原に関係するスタンプを集めました。また、スタンプを 1 個以上集めた参加者には、個数に応じてノベルティをプレゼントしました。ジェットシューター体験では、的あてを実施し、楽しみながら野焼きについて知ってもらえるきっかけとなりました。



スタンプラリー

スタンプラリー



夜のタデ原さんぽ

２．夜のタデ原さんぽ（※2）（8 月 16 日：タデ原湿原）

九重町の草原の魅力について、地元に住んでいる方々に知ってほしいと思い、九重町民限定で開催しました。夜のタデ原湿原をガイドが案内し、昼間とは違った森や草原の様子を五感で感じるイベントとなりました。最後は木道でのんびりくつろぎながらのお茶会も実施しました。夜空を見上げるときれいな星空が広がっており、参加者の方々にとっても非日常の特別な体験になったのではないでしょうか。

そのほか、9 月 20 日（土）には「草原の写真教室」、10 月 11 日（土）には「草原あるきと俳句を楽しむ会」を予定しています。また、10 月 18 日（土）～19 日（日）に実施される「九重ふるさと祭り」においても、ジェットシューター体験ブースを出店します。各イベントを通して、少しでも草原の魅力について伝えられるように頑張ります。

草原サミット･シンポジウム in ここのえ大会のホームページができました。こちらでプレイベントや本大会についてお知らせしています。

（※１）くじゅうフェス　「山の日」が施行された 2016 年から始まった自然にふれあいながらくじゅうを楽しむ九重町のイベント。

（※２）タデ原湿原　2005 年にラムサール条約に登録された日本最大級の中間湿原。



ジェットシューター体験

各地からの報告

モットーは“伝えることで自然を守る” 乙女高原案内人の養成と活動

（植原 彰：乙女高原ファンクラブ代表世話人）

【はじめに】

草原をはじめ自然を保全していく上で人財不足や高齢化が大きな課題になっている。火入れ作業における人財課題については、①各作業段階における具体的なマニュアルの作成、②実施体制の整備、③ルールの徹底に取り組んだ上で、④研修会等による人財育成が行われ、成果があがっている※1。

乙女高原では火入れによる草原管理は行われてこなかったが、地域の人口流失、高齢化など、火入れ同様、深刻な人財課題に直面している。そこで、乙女高原ファンクラブでは「乙女高原に人を呼び込む→乙女高原を案内し、乙女高原の自然の魅力や特徴、歴史などを知ってもらう→乙女高原のファンを増やす→乙女高原の自然を守る力を強める→さらに、乙女高原に人を呼び込む・・・」という好循環を目指して、乙女高原案内人を養成し、活躍の場を提供する取り組みをしている。本稿では、乙女高原案内人養成講座開催までの経緯、実際の講座の様子、講座修了後の様子を紹介する。



ロッジ前庭に案内ブースを出して来訪者への案内活動

【乙女高原案内人養成講座開催までの経緯】

乙女高原は山梨県山梨市の北部、秩父山塊のふところにある。標高 1,700m、面積 5.4ha の小さな草原を中心とした高原だ。本稿では草原の成り立ちやその経緯は割愛するが、この草原を維持するために 2000 年から毎年、『乙女高原の草原を守る!草刈りボランティア』という市民参画で草原を維持するイベントを官民協働で開催している※2。

草刈りボランティアを始めたころ、「なぜ草刈りが必要なのか」「なぜ刈った草を持ち出すのか。その場に置けば草の肥料になるではないか」といった声が多数聞こえた。「（草原保全のメカニズムなど）自然のしくみを知らなければ、（気持ちだけでは）自然は守れない」と痛感した。

また、当時、草原内にビニールシートを敷いて弁当を食べる人が見られたし、植物採集・昆虫採集する人は後を絶たない。それらをただ「やめてください」と禁止するのでなく、それらの行為によって自然にどんなダメージがあるかを具体的に説明し、納得いただいた上でやめてもらわなければ、かえって反感や反発を招いてしまう。

これらのことから、乙女高原の自然のしくみを中心に、乙女高原の歴史や自然の特徴、動植物などを人に伝え、乙女高原を守る仲間を増やすための人財=乙女高原案内人を養成しようと考えた。

養成講座の制度設計上参考にしたのが公益財団法人日本自然保護協会の自然観察指導員講習会※3 だった。自然観察指導の人財養成とはいえ、「自然観察からはじまる自然保護」というテーマが全体を貫き、「自然の観察」とともに「自然の保護」講義がある。また、講義の前に野外実習がプログラムされるなど「体験から学ぶ」ことを重視している。

自然観察指導員講習会のプログラムに学びながら、乙女高原での案内活動に生かせる内容を加味した。事務局やスタッフの負担が短期間に集中しないよう、3 か月間に 3 日の分散開催とした。



乙女高原案内人養成講座 3 日目「乙女高原の草花」野外実習

山梨県、山梨市、山梨市教育委員会に後援申請した。チラシを作成したら、諸施設・団体に配布依頼した。メディアにも告知依頼したが、反応はかんばしくなかった。

ファンクラブの予算だけでは経費をまかなえないので助成金申請することにした。本事業に適した助成団体を知らなかったので、山梨県ボランティアNPO センターに助言を求めた。助成金申請は期間が限られるため早めの対応が不可欠という教訓を付け加えておく。

養成講座のテキストも作りたい。さすがに第Ⅰ期（2003）～第Ⅲ期（2005）養成講座にテキストは間に合わなかった。しかし、第Ⅰ期の講義を録音して受講者有志で「テープ起こし」し、実習も受講生有志がレポートし、それらをまとめた『乙女高原案内人　誕生と成長の記録』という A4 判 188 ページの報告書を 4 年がかりで作り、第Ⅳ期（2008）のテキストとして活用した。第Ⅴ期（2024）は、前回開催から 16 年も経過していたため、テキストを大幅改定し、A4 判 270 ページ『改訂 乙女高原案内人養成講座テキスト 伝えることで守る 乙女高原の自然』を発行し、活用している。

【養成講座の実際】

2025 年、第Ⅵ期養成講座を開催した。募集 30 名に対し最終的な受講者は 16 名だった。スタッフには昨年=第Ⅴ期の修了生が多数応募し、1 日目 14 名、2 日目 14 名、3 日目 12 名と受講者に迫る人数だった。養成講座開催の成果といえる。

受講者には A4 判 4 ページの『当日のしおり』を、講師とスタッフにはこれに加え A4 判 4 ページの『スタッフ・マニュアル』を配布した。前者には、講師・スタッフ・受講者名簿、持ち物や注意事項、日程表を、後者には、講師・スタッフの出欠一覧、準備品一覧、各プログラムごとの担当スタッフや留意事項、救急医への連絡先等を記載した。それ以外の配布物として、受講者のプロフィール集、各日講座を振り返るアンケート、講師による資料等があった。

養成講座 1 日目は 5 月 25 日（日）に山梨市民会館で、2 日目は 6 月 8 日（日）に乙女高原で、3 日目は 7 月 27 日(日)に乙女高原で開催した。

標高 1,700m の乙女高原の 5 月は春を迎えたばかり。動植物がまだ多く見られないので、現地での野外実習は 6 月と 7 月に集中して行いたい。また、市街地から車で片道 1 時間かかる乙女高原まで行かなくても講義はできるし、市街地で行えば、開始時刻を早く、終了時刻を遅くできる。そのような理由から、1 日目に講義を集中させ市街地の市民会館で、2･3 日目に野外実習を集中させ乙女高原で行うよう計画した。本稿末にプログラム一覧を示す。



乙女高原案内人養成講座 3 日目（最終日）修了証書授与

【養成講座終了後の活動の様子】

第Ⅵ期養成講座（2025）後 8～9 月の乙女高原ファンクラブの活動は【表 1】の通りである。

【表1】2025年8月～9月の乙女高原ファンクラブ活動

実施日	活動名	参加者	うち案内人
8.02.	マルハナバチ調べ隊・盛夏	24	7
8.02.	夏の案内活動・5日目	7	7
8.03.	夏の案内活動・6日目	4	4
8.17.	訪花昆虫調査・8月	14	5
8.24.	樹名板設置作業	16	11
9.03.	日下部小4年68人の案内	9	9
9.06.	マルハナバチ調べ隊・初秋	18	8
9.09.	笛川小3年24人の案内	7	7
9.13.	訪花昆虫調査・9月	8	6
9.20.	植物群落調査	6	6

活動への参加者やスタッフはメールマガジン（希望者に配信。現在約 600 人）や案内人メールで募集している。多くの応募者があるからこそ、このように週 1 のペースで活動を立案でき、かつ、有効に実施できている。

【表 2】は年度ごとの学校児童生徒への案内活動の状況である。コロナ禍下の 2021 年度は学校からの要請はなく、翌 2022 年から要請が再開された。養成講座を再開した 2024、2025 年度はぐっと多くなり、2024 年度は年に 7 回と特に多かった。

【表2】学校児童生徒の案内回数ならびに参加案内人数

	案内回数	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	のべ人数
2021年度	0								0
2022年度	1	3							3
2023年度	3	5	6	4					15
2024年度	7	6	9	6	4	8	5	5	43
2025年度	5	8	6	9	7	未定			30

養成講座を開催し、多くの案内人が確保できなければ、学校からの要請をまかないきれず、実施数はもっと少なくなっていたか、少人数の案内人で大人数の児童生徒に対応しなければならなかったはずである。

また、表中の網掛けは1学年3クラスという地域で最も大規模な学校からの要請で、養成講座が途切れていた2023年は案内人6人で60人を超える児童に対応していたが、養成講座を再開した2024、2025年度は9人で対応し、安定的に実施できている。



小学校３年生に乙女高原の案内を始める前の案内人自己紹介

乙女高原案内人は活動だけでなく、乙女高原ファンクラブの運営そのものにも参画している。クラブの運営は1.5か月に1回の世話人会で話し合われているが、現在 11 名の世話人全員が案内人である。また、会報の編集委員4名全員も案内人である。

【おわりに】

このように、乙女高原案内人は乙女高原の保全活動にとって無くてはならない存在になっている。

だが、案内人の「人口流失」は頻繁にあるし、案内人といえども「高齢化」と無縁でない。2008年までの4回の養成講座で約100人の案内人を養成したが、2024年に養成講座を16年ぶりに開催しなければならなかった理由は、まさにここにある。養成講座開催には入念な準備と多大な事務作業が必要で、資金は助成金でまかなうとしても、これらの人的・時間的コストを任意団体が負担するのはたいへん厳しい。

また、多くの活動が可能になるのは喜ばしいことだが、それらの活動を実現させるためには、それらをコーディネートする担当者の負担が増す。

このような課題はあるにしろ、人財養成事業にはそれらを補って余りある価値があると考える。

※1 高橋佳孝・鷲津大輔(2025)「火入れ作業の安全確保と心がけ」『未来に残したい日本の草原2024』46-53

※2 未来に残したい草原の里 100 選運営委員会(2023)『未来に残したい日本の草原』34-37

※3 https://www.nacsj.or.jp/shidouin/

第Ⅶ期 乙女高原案内人養成講座2025 日程表 乙女高原ファクラブ

時	1日目 5月25日（日）			時	2日目 6月8日（日）			時	3日目 7月27日（日）		
9	9:15～9:30	集合・受付		9				9			
	9:30～9:50	開講式・オリエンテーション	室内		9:45～10:00	集合・受付	野外		9:45～10:00	集合・受付	野外
10	10:00～10:50 【植原 彰】	野外実習① 「インタープリテーション体験」	万力公園	10	10:00～10:15	オリエンテーション		10	10:00～10:15	オリエンテーション	
					10:15～11:35 【時田 恵】	A班・・・野外実習② 「乙女高原の地形地質」	野外		10:15～11:35 【井上敬子】	A班・・・野外実習④ 「乙女高原の植物～草花」	野外
11	11:00～12:15 【植原 彰】	講義① 「インタープリテーション」 ～案内するときの姿勢とコツ	室内	11	【北垣憲仁】	B班・・・野外実習③ 「乙女高原の動物」		11	【小松澤靖】	B班・・・野外実習⑤ 「乙女高原の植物～樹木」	
					11:45～12:15	自己紹介			11:45～12:15	ワークショップ 「わたしたちの今後の活動」	
12	12:15～13:00	≪昼 食≫		12	12:15～13:00	≪昼 食≫		12	12:15～13:00	≪昼 食≫	
13	13:00～14:15 【伏見 勝】	講義② 「自然の保護」 ～生物多様性の保全と私たちの暮らし	室内	13	13:00～14:20 【北垣憲仁】	A班・・・野外実習③ 「乙女高原の動物」	野外	13	13:00～14:20 【小松澤靖】	A班・・・野外実習⑤ 「乙女高原の植物～樹木」	野外
14		≪休 憩≫		14	【時田 恵】	B班・・・野外実習② 「乙女高原の地形地質」		14	【井上敬子】	B班・・・野外実習④ 「乙女高原の植物～草花」	
	14:30～15:45 【三枝かめよ】	講義③ 「乙女高原の歴史」 ～草原が支えた麓の人々の暮らし			14:30～15:15 【鈴木辰三】	乙女高原の活動紹介			14:30～15:00	ふりかえり 書類の記入	
15				15	15:15～15:30	諸連絡・質疑応答		15	15:00～15:30	閉講式・認定証授与 諸連絡・質疑応答	
	15:45～16:00	諸連絡・質疑応答			15:30	≪解 散≫			15:30	≪解 散≫	
16	16:00	≪解 散≫		16				16			
	於：山梨市民会館(実習は万力公園)				於：乙女高原(荒天時等 ロッジ)				於：乙女高原(荒天時等 ロッジ)		

ヒゴタイの自生地を訪れて

（布野日奈子：東京大学大学院）

環境省により絶滅危惧種に指定されている「ヒゴタイ」は、キク科の多年草で、丘陵地から低山地の日当たりのよい草原に生息する植物です。草地が減少する現代で稀少なヒゴタイですが、この度、広島県庄原市比和町・高野町にて、自生する姿を拝見させていただきました。

実際にヒゴタイの実物を見ると、まっすぐに茎を伸ばし、その先で無数の白紫の蕾を球形に育む姿がとても美しかったです。また、蕾から紫色の花を咲かせると、その球形はひときわ大きくなり、まるで小さくて優しい花火のような愛らしさでした。

自生地を拝見し、特に驚いたのは、ヒゴタイが自生する周辺の環境です。今回訪れた比和町・高野町のヒゴタイ自生地は、ともに自生地付近に家を持つ方の私有地でした。家主の方は、ヒゴタイが自生する部分だけでなく、周辺一帯の広大な面積を草刈りされているのですが、それが丁寧に刈られており、とてもきれいなのです。それも、ご高齢の家主がたった一人で管理されています。具体的には、比和町では田畑のすぐ近くにヒゴタイが自生していますが、田んぼのあぜ道や畑の周辺まで、土が見えるほどきれいに草を刈られていました。そして、お宅の玄関には、様々な長さに整えられたヒゴタイが生けてあり、生活の一部にヒゴタイが存在することを伺えました。一方、高野町のヒゴタイ自生地は、田んぼのすぐ隣にある森林の斜面です。この山は、樹木の間を人間が散歩できるくらいのゆったりした立木密度で、家主によって斜面、および、隣の田んぼのあぜ道をしっかりと草刈りされていました。比和町・高野町のどちらのヒゴタイ自生地ともに、ヒゴタイの他、オミナエシなど様々な絶滅危惧種が自生するホットスポットでした。



ヒゴタイの花

今回、感じたことは主に２つあります。

一つ目に、田畑を耕し周辺の草を刈るという人間の営みの中で自生するヒゴタイと、盆花としてヒゴタイを楽しむ地域の方々の姿に、一つの“自然と人間の共生の在り方”を勉強でき、感銘を受けました。

二つ目に、里山の人口減少が加速する現代で、今目の前にあるヒゴタイですが、今後自生する環境をいつまで維持できるのか、ということに責任を感じるようでした。

経済成長とともに人間の生活と自然は分断され、現在、地球環境のために自然の保全・創出・再生の動きが増えているなかで、同時に自然の利用(価値)についても工夫されています。一方、里山では、比和町・高野町のように、農業をはじめ、一人ひとりの生活の中で適度に自然を利用することで、人間の生活を豊かにするだけでなく、自然の保全・創出・再生・利用を同時に果たしてきました。里山の人口減少は、様々な視点から見て課題です。各問題の解決のためにさまざまな動きがあると思いますが、微力ながらも、私も解決に向けた意識を持ち続けていたいと思います。





左：田の畔に生えるヒゴタイ

右：盆花

四国の草原を訪問しました （ネットワーク事務局）

皿ヶ峰（高知県高知市）

9 月 25 日、26 日と、四国の草原を訪れる機会がありましたので、その様子を報告します。

まず訪問したのが高知市内の皿ヶ峰です。標高 163m で、高知駅から南に約 3km、周囲は住宅地に囲まれた、市街地に残る草原といった場所です。もともとは採草利用が行われていたようで、一部ではヤギの放牧も行われていたそうです。また、草原景観が残された理由のひとつが、度重なる山火事だそうです。2000 年代に入ってからも数年に 1 度は山火事に見舞われており、直近では 2024 年の冬に起こっています。当地でもうひとつ興味深いのは、草原が残る斜面に、点々とお墓がある点です。真新しい墓石だけではなく、地衣類に覆われた古い墓石も数多くありました。古い時代では江戸時代のものもあるそうです。山火事の原因ははっきりしないようですが、失火によるものが多いのでは、とのことでした。

草原の中を歩くと、山火事からの経過時間によって、低木が優占する場所、草本類が優占する場所と、植生にも大きな違いが見られました。また場所によっては母岩のチャートが露出した場所もあり、そのような場所では、草丈の低い草原が見られます。このような場所には、希少な植物が多く見られるとのことでした。

不定期な山火事によって草原景観が残されていますが、山火事が起こらなければ森林化が進むことは明白であり、当地の維持は今後の課題とのことでした。こんな市街地の近くに、眺望の素晴らしい、絶滅危惧種を含む多くの草原性植物が生育する草原が残っているのは、奇跡といえるでしょう。今後の動向にも注目していきたく思います。



皿ヶ峰の草原と高知市街

塩塚高原（徳島県・愛媛県）

9 月 26 日には、徳島県と愛媛県の県境に広がる塩塚高原を訪れました。徳島県側の駐車場から尾根沿いの歩道を歩き、塩塚峰山頂を経由して、愛媛県側の駐車場まで歩きました。当地は山頂から稜線周辺では春先に山焼きが行われており、それにより約 46ha のススキ草原が広がっています。かつては採草地として利用され、山焼きにより維持されていましたが、1970 年代からしばらく中断されたそうです。1990 年代頃に山焼きが再開され、現在は、徳島県側では地元三好市により、愛媛県側は山焼き実行委員会により行われています。徳島県側の山焼きは夜に行われる、愛媛県側は消防団の訓練として行われている、とのことでした。愛媛県側の草原では、周辺の茶畑のマルチとして利用するために、今でも一部採草が行われているそうです。

きれいなススキ草原とは裏腹に、草原内の花が少なくなっているとの話もでました。原因はシカによる食害。とくにオオバギボウシへの食害が顕著で、以前は一面に咲いていた花が、ほぼ見られなくなったとのことです。途上でも、草の茎に残った食べあと、シカの角研ぎのあと、獣道などが散在し、シカ害の拡大が懸念されました。

今回の訪問では、石川慎吾氏、比嘉基紀氏、瀬戸美文氏に、案内などのお世話になりました。お礼申し上げます。



塩塚高原のススキ草原

草原をめぐる動き（2025 年 10 月～2026 年 1 月）

10/4-5 草原と森の再生プログラム～山地崩壊箇所緑化のためのススキの種採集とミズナラ林整備～（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
10/4 自然観察交流会⑤ （場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
10/11 東お多福山草原ハイキング～草刈り体験もちょこっとあるよ～（場所：兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先：東お多福山草原保全・再生研究会）
11/8-9 上ノ原の茅刈り （場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
11/8 八幡湿原の野鳥観察会（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）
11/15 乙女高原自然観察交流会⑥ 草刈り準備（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
11/15 東お多福山草原晩秋の全面刈り作業（場所：兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先：東お多福山草原保全・再生研究会） 12/6 も開催
11/23 第 24 回乙女高原の草原を守る！草刈りボランティア（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
11/23 千町原の茅刈り （場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
11/29-30 上ノ原の茅出し・山の口終い（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
12/6 乙女高原自然観察交流会⑦（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
12 月中旬 野焼き支援ボランティア初心者研修会（場所：熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター「草原学習館」、連絡先：公益財団法人阿蘇グリーンストック）（他開催日あり）
1/10 小貝川の野焼き（場所：茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先：自然友の会（水海道市））
1/10 乙女高原自然観察交流会⑧（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
1/11 菅生沼の野焼き（場所：茨城県坂東市菅生沼、連絡先：ミュージアムパーク茨城県自然博物館）
1/25 第 23 回乙女高原フォーラム（場所：山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
1 月中旬 田島ケ原サクラソウ自生地の草焼き（場所：埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ケ原サクラソウ自生地」、連絡先：さいたま市教育委員会 文化財保護課）
1/26 若草山山焼き（場所：奈良県奈良市奈良公園内若草山一帯、連絡先：若草山焼き行事実行委員会事務局（奈良県奈良公園室））
1 月下旬 本州最南端の火祭り（場所：和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先：串本町観光協会・串本町役場産業課）
1 月下旬 都井岬の野焼き（場所：宮崎市串間市都井岬、連絡先：串間市観光物産協会・都井岬ビジターセンター）
※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

未来に残したい草原の里 100 選「認定書授与式・草原の里交流フォーラム」開催のお知らせ

新たに草原の里 100 選に認定された地域の授与式とフォーラムを下記のとおり開催しますので、多くの方の参加をお待ちしております。
【期日】2025 年 10 月 14 日
【場所】東京農業大学
【内容】詳細は以下をご覧下さい
https://sato.sogen-net.jp/?p=3973

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 64 2025 年 10 月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】来年の全国草原サミット・シンポジウムに向けて、機運醸成のためのプレイベントなどが催されています。なかでも子ども向けのジェットシューターの体験は、非常に盛り上がったと聞いています。将来の担い手を育てる上でも有意義な取り組みと思います。全国に広がるといいですね。